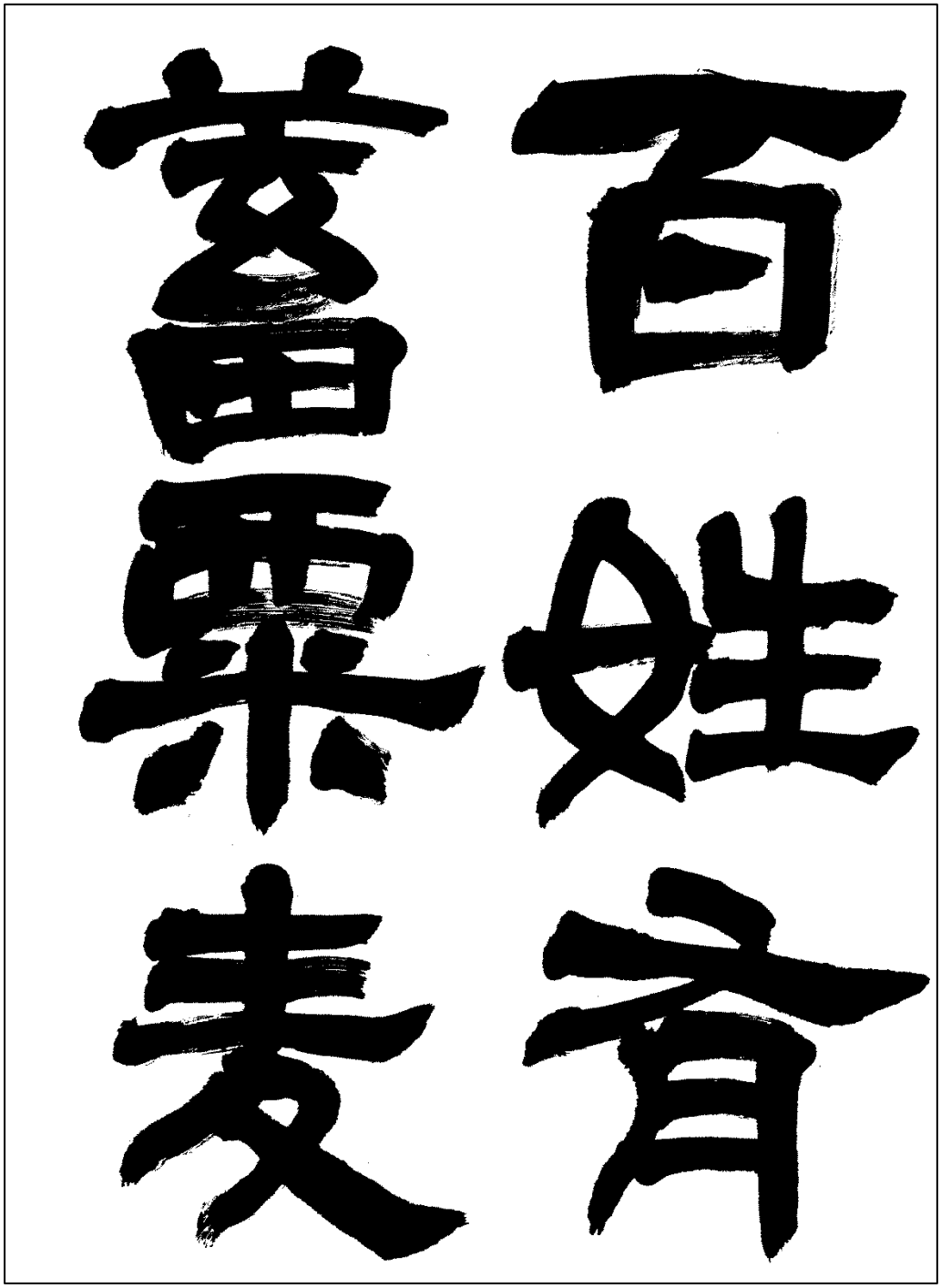
西狭頌臨書（半紙参考作品）



山田　起雲　臨

【読み】百姓（ひゃくせい）　粟・麦・（五銭を）蓄（たくわ）うる有り。

【解説】

西狭頌（せいきょうしょう）はいわゆる三頌（石門頌・西狭頌・郙閣頌）のひとつで、後漢の建寧四年（一七一）、甘粛省成県抛沙鎮の魚窾峡（ぎょきょうきょう）という深い峡谷の崖壁に刻された磨崖碑（自然の岩盤を利用して文字を刻した刻石）です。崖面は題額を除き高さ二二〇㎝、広さ約三四〇㎝で、本文は二〇行、行ごとに二〇字。第二一行目には完成の年月日を加えています。内容は西狭（武都郡の西の峡谷）の険阻な場所を修治し、人々の往来を安全ならしめた武都太守李翕（りきゅう）の功績を頌えた記念文です。

書体は八分隷を主としますが、篆体の点画を加えた字もあり、また横画の起筆や人（にんべん）・玉（たまへん）の初画をときに二筆で扱う筆法など、特異な一面もあります。